

レジスタンスプリキユ ア

ベリー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その世界は闇に覆われた世界。

感情のなくなった世界に生きる心有る少年少女たち。

どうなるかは誰にも分からない。

「色づき出す喜び??キュアジョワ??」

「沸き上がる怒り??キュアファシエ??」

「浮き上がる悲しみ??キュアトリステス??」

「踊り出す楽しさ??キュアジョワイユ??」

「綴られ出す物語??キュアストーリーア??」

目次

プロローグ	1
プロローグ2	5
第一話「私の想い、キュアジヨワ誕生」その1	9
第一話「私の想い、キュアジヨワ誕生」その2	15
第二話「怒りの炎、キュアファシェ誕生」	23

プロローグ

そこは暗い場所だった。

そこは静かな場所だった。

そこは町のようにたくさんの人が歩いている。

だが誰も話そうとせず話し声は聞こえなかった。

よく見てみると誰も目に光がともっておらず、見えているにも関わらず何もうつして
いなかった。

誰かの声も誰の耳にも届かなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

またある場所に小さな子どもがいた。

その子どもには光があつた。

その子どもは周りの様子を見て異常だと思った。

誰も喋らない、誰も笑わない、誰も怒らない、誰も悲しまない。

誰も必要以上のことをせず楽しいことはない。

空は闇に覆われ光は届かず草の一本もない住宅地。

子どもはいった。

「何だこの世界!?!?!」

.....!?!?!.....

なんか流行りの転生したみたいだが、何だこの地獄絵図???

え、マジでなんなのいま俺は5才くらいだと思っただけこの世界何?????

幼稚園はあるし遊びはあるけど誰も笑わないし先生もただいるだけ。

どういうことなんだろう?

.....

あれから数ヶ月たって分かったことがある。

この世界ヤベエっていうことだ。

何がヤバイかというと全てだが説明していこう。

まず一つ目にこの世界の人たちには基本的に感情が無い。

なぜ基本的にかかとうとたまに感情がある人が生まれるからだ。

この事はその感情がある人達に教えてもらった。

なぜそんな人たちに巡り会えたかという感情がある人たちはこの世界では存在が

駄目なようでなんか黒い化け物が襲って来た。

そのときに助けてもらえた。

そして二つ目

この世界はいくつもの闇に支配されているらしい。

何でそんなことになっているかは分からないらしい。

今自分は普段どおり幼稚園にいる。

相変わらず何も起こらない場所だ。

自分は前世の記憶がある。

皆当たり前のように喋って笑って怒って泣いて楽しんでいた記憶がある。

こんな世界はおかしい、どうにかしたい、でも今は何も思い付かない一人じゃ何もでき
ない。

それでも諦めることは出来ない。

だってこんな世界面白くない、転生したならもっと楽しいことがしたい。

だから覚悟を決める。この世界に感情を与えるその日まで自分は諦めない、すべては
楽しい生活のために。

今ここから始まるのだ、新しい物語が。

.....

この世界に生まれた子どもはいつたいていどうやってこの世界に感情を与えるのかそんなこと分らない。

だが先のことなど誰も分らない、この子どもの終着点は

プロローグ 2

私は異常だと言われている。

私は面白いことがあれば笑うことが出来るし悲しければ泣くことが出来るし怒ることも出来る。

でも皆はそうじゃない。

お父さんもお母さんも学校の友達も誰も出来ない。

だから私はどれもしないことにした。

皆出来ないんだから私だけが出しても意味が無いから。

そんなときに私と同じ事が出来る人達がやって来た。

その人たちは私と一緒に来ないか？と誘ってきただけど私は行かなかつた。

いくら感情が出せないといっても皆から離れたくは無かつたから。

だから私は皆と同じようにしていることをいうとその人達も私のことを異常だといつた。

感情があるのだから出さなければダメだ等と言われた。

でも、逆に聞きたい、この世界で感情を出して何か意味があるのと。

私も昔は感情を表に出していたから黒いやつによく襲われていた。今でも襲われることはあるがそれでも昔よりは少ない。

そんな危険があるのに出すメリットがあるのかと聞くとその人達は何も言わずに去っていった。

私はこのままでいいと思っていた。

すべてが変わったあの日までは。

.....

僕は他の感情がある人達と共に色々な場所で他の感情がある人達を探しながら旅をしている。

一つの場合に留まることは出来ない。そんなことをすれば黒い化け物に居場所を見つけられ皆連れ去られてしまう。旅をしている途中にも何人も連れ去られた。

連れ去られたあとどうなるかは知らないが誰も帰ってこない以上だいたい予想は出来る。

このまま逃げ続けるだけでいいのか？とは何度も思ったがああの化け物への対抗策なんて何も無い。

どうしようもないのだと無理矢理納得して今もそしてこれから旅を続ける、そう、思っていた。

.....

この世界で生きる意味はあるのだろうか？

そう聞かれたら私は答えることは出来ないだろう、いや私以外の誰に聞いても答えられないだろう。

そのくらいこの世界は何もかもが足りない。

皆ただ死ぬのが怖いから生きている、それだけだ。

いや、死ぬのが怖いと思ってる分まだいいだろう。

生きてて良いことがなければ誰も死ぬのが怖いだなんて思わないだろうから。

でも、そうじゃない人達もいる。感情があるから考えすぎて生きる事を諦めた人達もいる。

私ももう諦めようかと思う。

でも最後にこの辺りを散歩してみようと思う。

.....

この世界は止まっちゃってる。

誰も何かしようとしないうし感情がある人達はもう諦めている感がある。それでも認めたくなくて足掻いてる人達もいるけど。

私もその一人、だってこのまま終わったら、抵抗する人が居なくなったら何も残らな

い。

それは悲しい。

何も残らなかつたら本当に意味がなくなる。

それだけは嫌だから私は足掻く、最後まで、

第一話「私の想い、キュアジヨワ誕生」その1

その日、私はいつも通り生活していた。

感情を隠して周りに会わせていた。それでもあいつらを完璧に欺くことは出来ない。今日久しぶりに襲われた。

昔よりは少ないけど今でも襲われることはあるからいつもは別に気にしていなかった。

それでも私は今日のことは絶対に忘れないだろう。

私が感情を隠すことを止めた日だから。

.....

おはよう、その言葉に帰ってくる言葉はない。普段どうりの朝。

私は珍しいことに感情がある、珍しいというだけで他にいない訳じゃないけど少ない。

なぜかと言われてもよく分からない。昔世界が闇に覆われたときに感情がなくなっただけで言われてるけど本当かは分からない。

正確な理由は分からないけど別に私は気にしていない。

だって生まれたときからずっと変わらないから。

私の周りに他に感情がある人はいないけど私が周りに合わせればいいことだし特に問題ない。

今日もいつも通りの毎日が始まる。

早く家を出ないと学校に遅刻してしまう。

学校は本当にただ勉強するだけの場所なのだが、皆反応が無いから本当に授業を聞いているのか分からない。

私も授業を聞いててもよく分からないから、半分聞き流している。テスト？それはそのときに考えるから良い。

ちなみに授業をやっているのは人間じゃない、機械だ。

この機械はどこで作られているのかは分からないけど学校以外にも配給所にもある。

聞いてても分からない授業が終わったことだし家に帰ろう。帰り道には数少ない緑がある。この世界は闇に覆われたときに日光も遮られてしまったから植物も少ない。

でも学校や配給所には植物があるからこの近くはなんか落ち着くからたまに立ち止まってはゆっくりしている。

でもそれがいけなかった、いつも見つからないから忘れていたけどこの近くにはいつもあいつらがいる。

今日は運悪く見つかつてしまった、こちらに向かつてくる。

見つかったら逃げるしかない、あいつらは感情がある人達を見つけたら見失うまでずつと追いかけてくる。

しかもでかいし動きも早いから普通に逃げきるのは不可能に近い。いつもはものに隠れたり複雑な道を適当に走ったりして逃げるけど残念なことにこの近くにはそのどっちもない。

どうしよう、捕まったらどうなるか分からない。でももう今の日常に戻れないのは確実、それだけは嫌だ私は普通にいききたい。

「あっ」

ばたっ

最悪だ、最悪のタイミングで転んでしまった。

もうすぐそこにあいつがいる、手をこちらに伸ばしてきた。

もうダメだ、と思って目を閉じた。

でもいくら待っても何も来ない、捕まえられた感覚がしない。

だから、そつと目を開けるとさつきまでいたあいつは少し離れたところで倒れていて私の目の前には少女が立っていた。

髪は白く着ている衣装も真っ白、背中しか見えていないので顔や目の色は分からない

が、いつの間にかそんな少女がいた。

「大丈夫か？」

その少女が背中を向けたまま話しかけてきた。

「大丈夫です、でももうダメだと思ってました。」

そう答えるとそうか、とだけ返してきてそのままあいつに向かっていた。

そこからは驚きっぱなしだった。だって私はあいつらに対抗出来る力を持っている人なんて知らない。

それなのにあの少女はあいつを圧倒している、ただ私があいつに襲われてからそこそこ時間がたっている、このままだとそろそろ・・・

バキツドガツドスン

あいつが3体増えた。いや、現れた。

あいつらは感情がある人を見つけると他のやつに連絡を取り集団で襲ってくるのだ。

1体でさええどうしようも無いのに集団で来るのでたまったものじゃない、私自身ここまで逃げ続けられたのは奇跡だと思っている。

あいつらは4体で連携を取りながらあの少女に攻撃し始めた。

それでも、変わらなかった。

少女は1体1体相手取りすべて吹き飛ばした。

「ここじゃ、話すことも出来ないから逃げるぞ」

という私を抱き上げるとすごいスピードで走り始めた。

.....

「ここならいいか。」

しばらく走って離れたところで私をおろした。

「ありがとうございます。」

とりあえずお礼をいうと別にいいと言った。

「それより、お前一人なのか？どこかの集団に入っていないのか？」

「うん、私はどこにも入っていないし感情がある知り合いもないよ。」

「どこか入らないのか？その方が一人にいるよりは安全だぞ？」

「別にいいんだよ、私は今の生活が好きなの。」

そういうと少女は少し考えて、

「そうそれならいいんだけど。そろそろ行くよ、お前も気をつけておけよ、いつでも助けられるとは限らないからな。」

「わかつてるよ。」

そういうと少女は跳んでいった。

さて私も帰ろうかと言うところで気がついた

さっきまで少女がいたところに小さな透明な石みたいなものと教科書のようなものが落ちていた。

あの少女が落としていったんだと思うけど、もうどこにいるか分からない。

次会うことがあるかどうか分からないけど、このまま放置していてもどうしようもないから私が持つておこう。

このときの私は特に考えずに拾ったけど、これが始まりだった。

第一話「私の想い、キュアジヨワ誕生」その2

さてまた襲われる前に早く家に帰ろう。

そういえばさっきの白い娘何だったんだろう？

あいつらに対抗出来る人はいない。それが今までの認識だった。でもいた、それも何体も同時に戦って勝てる人が。私は興味ないけどまだこの世界で抵抗している人が少ないけどいるらしい。その人たちにとってはすごいことだろう。今まで倒せなかったやつらが倒せる、それはこの世界を元に戻すための大きな一歩だから。

まああの娘は一人で行動してみたからあまり知られてはいないだろうけど。

私は今の生活が好き、でも皆が感情を出せるようになったらもつと楽しいのかな？
想像できないけど、きつと楽しいのだろう。

私にはなにも出来ないけど頑張ってほしいかな。

ヒューー

何の音？

「おや？こんなところに感情がある人がいますねえ？」

「??あなたは誰？」

「誰ですか、まあ今の人たちは知らないのも無理ありませんねえ。しばらく姿を見せませんでしたからねえ。」

「とりあえず質問に答えて」

「そうですね、久しぶりですし名乗っておきましょう、

私はサファア。この世界を覆う闇の中の一人です。」

「闇の中の一人？ どういうこと？」

「おや？ あなたは知りませんでしたか。では特別に説明してあげましょう。まずこの世界を覆う闇、つまりは組織なのですがそれがひとつではありません。いくつもの組織がこの世界を覆っています。昔は数が多かったですが、今は組織同士の争いで数が減り今では5つになっています。その争いが姿を見せなかった理由ですね。」

そして私は残った5つのうちの1つそのボスですね。」

何を言ってるか半分くらいわからなかったけどこいつが相当にやばいやつだと言うのはわかった。

世界を覆う1つ、そのボスヤバイ。

「それで、あなたは感情を持っていますねえ？ その感情頂きます。何、他のやつらはエグいことしてるらしいですが私は感情を頂いたら元に戻してあげますよ。あなたは感情をかくして周りに合わせようとしているようですし、なくなつた方が楽でしょう？」

確かにそうかも知れない、私も皆と一緒になればもう襲われることもなくなるし、何も心配しないで生きれる、

今までの私だったらすぐにうなずいたことだろう。

でも、さつきあの娘に会ったとき少しだけだけど皆が感情があつて笑いあえたらな、と思つてしまった。

だから即答は出来ない、でも私にはあの娘みたいな力は無い、このままでは感情を取られるだけ。

逃げることも出来ないだろう。

せつかくさつき助けて貰えたのにここで終わり？

それは嫌だ、さつき少しだけでも楽しいことが考えれた。だから終われない。

(おい?!)

? 何の声?

(ここだよ?!ここ?!)

さつきの石から声が聞こえて来る。幻聴かな?

(幻聴じゃねえから?!?!取り敢えずもう余裕ねえだろ、だから一つだけ聞く。

お前はこいつと戦える力にいられたら戦えるか?今だけじゃない、これからだ。)

そんな大事なことを今すぐ決めないといけないの?

(今決めないと終わりだぞ?)

それもそうか。

.....わかった、これからも戦う、皆で笑顔で過ごしたいから。

(それでいい、じゃあ石を握って今その気持ちを強く込めろ、そうすれば力を与えられる。)

わかった、石を握る、皆が笑ってる所を想いながら強く込める。

気が遠のいていく、そして見た、皆が笑っている皆普通に過ごしている。分かった、私は笑いたい。

私の体を光が包んでいく、髪が伸びて色もピンクに変わりツインテールになった。服は上はピンクと黄色、スカートはピンクに黄色のポンポンがたくさんついていく。

スカートは膝下までである。

「色づき出す喜び??キュアジョワ?!!」

いつの間にかそう名乗った。

「ほう?プリキュアか、今覚醒したばかりのようですねえ?そして一人だけ。それで私を倒せるとも思っているんですかねえ。」

「やってみないと分からないでしょ?!!」

そう言って駆け出す。力が湧いてくる、これなら戦える。

サファーに殴りかかる、避けられる、蹴りを入れる、止められる。

「フム、昔のプリキュアよりもパワーもスピードも高いですね。それでもこの程度、何でもありませんねえ」

そう言つて私を捕まえて投げ飛ばした。

「うぐう」

「やはり、一人ではこの程度ですか、まあ楽で良いですけどね、では感情を頂きますよ。」
強すぎる、捕まえられたときも分からなかつたし壁に叩きつけられてから気づいた。

逃げれ無い。

「大丈夫か!!?」

そう思つていると声が聞こえてきた。

そちらを見るとあの白い娘がいた。

「おや、2人に増えましたか。それでも少しめんどくさくなるだけです。」

「・・・お前は誰だ?」

「あなたも知りませんか、ではもう一度言いましょう。」

私はサファー。この世界を覆う闇の中の一人です。」

「そうか、やばいな。」

そしてこちらによつてくる。

「あいつは今戦っても勝てない。2人ともやられるだけだ、何とかして逃げるぞ」
驚いた、あれだけ強いこの娘がそういうのだ、そんなにあいつはやばい奴だったんだ
と今さら気づく。

私が頷くと、

「それじゃあ、まずはあいつの目をどうやって掻い潜って逃げるかだな、取り敢えず少し
だけでも俺が時間を稼ぐから考えてくれ。」

そういうと私が答える前にあいつのほうに走っていった。

どうしよう、あいつの目を掻い潜る方法？そんな物思い付かない、そうだ、あの石に
聞いてみよう。

ねえあいつの目を掻い潜る方法って無い？

（そうだな、お前は光を操れるから至近距離で浴びせれば目を眩ませれるんじゃないか
？）

上手くいきそうにないけど方法思い付かないしそれでいこう。

そして私は全力で走り出した、あいつの方を見るとあの娘が投げ飛ばされる所でこ
らに気づいていないようだ

接近する、あと少し、今

「くっ、何ですかこれは！」

??????

上手くいったらしい。予想外だ、取り敢えず成功した私はあの娘を抱いて逃げ出した。

「……………逃げられましたか。ですがあの程度ならば脅威にはなりません、放つておきましょう。」

……………

「成功したな」

しばらく走って追って来ていないことを確認して、足を止めた。

「私だけじゃ逃げられなかった、来てくれてありがとう。」

「大したこと出来なかったけどな。」

「そんなことないよ、貴女があの時助けてくれたから私は希望を持てた、だから変身できた。」

「それ本当に俺関係ないと思うんだがな。お前が自分で立ち向かうと決めたんだろう？決めたのはお前なんだから俺は関係ない。」

「それよりお前は今までの生活が好きだったんだよな？」

「戦うと決めたなら戻れないぞ？」

「分かってる、でも私は叶えたいことが出来たから叶えるまでは戦い続けるよ。」

「そうか、なら俺と一緒に来るか？一人で戦うよりも2人の方がいいだろう。」

聞かれるまでもない答えははいしかない。

「それじゃまずは変身解くか。」

そういうと少女は変身を解いた。

「ええ?!男だったの????」

「あ、そうか変身しると女だからそりや分からないよな」

驚いた、だけどそこまで気になりはしない、だって助けてくれたのに変わりはないし。

「じゃ、自己紹介するか、俺はまこと、お前は?」

「私はきりだよ、よろしくね。」

「ああ、よろしく頼むぞ。」

そうして私たちは出会った、私は戦う、皆で笑いたいから。

第二話 「怒りの炎、キユアファアシ誕生」

いつも通り旅をしていた日、僕はある噂を聞いた。

今まで誰も抵抗出来なかったあいつらを倒せる人がいるらしい。

僕は、その噂を聞いたときそんなことあるわけがないと思いつつ少し期待をしてみたら、自分が倒せたら今まで旅をしている間に連れ去られてしまった人達を助けられたかも知れない、そして皆を守れたかも知れない。

そんなことを考えると涙が出てきた。誰かが連れ去られる度に泣いた、皆大切な人だった。

もし本当にいるなら会ってみたい、そして僕にもその方法を教えてほしい。皆を守りたい。

「おい、アグルなにしてんだよ。」

「あ、ごめんもう出発？」

「そうだよ、早くいこう。」

この2人はメルトとブラン。僕がこの集団に入ったときから一緒にいる仲間

だ。……もう僕が入ったときからいるメンバーは少ない。この2人もあわせて5人くらいだ。僕が入ったときのリーダーも居なくなってしまった。

「あつでもちよつと先に行つて少し待つててくれないかな、忘れ物があるんだ。」

「何を忘れたんだよ？まあいいか、分かった先に行つて待つてるぞ。」

「早く来てね??」

2人は歩いていった。僕も忘れ物をとりにいこう。

.....

えつと、確かこの辺りにおいたはずだけど、有った!!入ったときにリーダーからもらつたペンダント、これを忘れるなんて考え込みすぎてみたいだ。

さて、早くいかないと。

(ねえ、その貴女ちよつといい?)

ん?何か声でした?でもここには僕しかいないし。

空耳かな?

(空耳じゃないわ、ここよここ)

心の声を、読んだ???というか本当にどこから聞こえてくるんだろう?

あれ、なにか光つてる。

(そう???)よ、それよりあなたはちゃんと見えるのね?

普通の人は声は聞こえても光ってるのも見えないはずなのだけど。普通に見えている、ここまで光っていけば普通に見えると思うけど。

(それが見えないのよ。それより見えるなら私を連れていきなさい、次いつ見える人に出会えるか分からないんだから。)

えー、なんかよく分からない喋って光る石を持っていくのか？

(私を持って行ったらいいことが有るかも知れないわよ?)

それでも怪しい。

「オーイ、アグルなにしてんだよ??遅いから迎えに戻つて来たぞ。」

まずい??時間をかけすぎた。

急がないと??取り敢えずこの石も持っていこう。

「本当にごめん、メルト??迎えに来てくれてありがとう。」

「全く、戻ったら皆にも謝れよ?」

「もちろん、早く戻ろう」

皆に迷惑をかけてしまった。

(まああんまり気にするんじゃないわよ)

他人事みたいに言ってるけど大体君のせいだよね?

(まず忘れ物したのは貴女よね?)

はい、そうです、人のせいにしてすいませんでした。

(それでいいのよ。)

この石偉そうだなあ。

「あれ、さつきまで皆ここで待つてたんだがどこに行ったんだ？」

どうやらさつきまでいたところに皆がいらないらしい。

先に行つたとかは無いと思うからどこに言つたんだらう。

ひとまずこの辺りを探してみよう。

.....

この辺りを探してみただけどどこにもいない、どこに行つたんだらう。

「アグル、そつちいたか？」

「いや、見つからなかった。ここまで見つからないのは可笑しいよね？」

「そうだな、今までも誰かが遅れてもいなくなつたなんてことは、なかつたんだ。何かが

起きたのか？」

ドガーデンドタドタドタドタドタ

「この音は、まさかあいつら???しかもこの音はかなりの数いるぞ。」

「え、この近くにたくさんのあいつらが?それで皆いないということとは。」

最悪の事態になった。そんな状態で想像できることなんて一つだけ。

「皆が、捕まった?」

その先の言葉を紡げなかった。皆が、捕まった。

僕が遅かったから? 皆集まっていたから捕まった。

考えれば分かる。今までも少しのミスで減っていったじゃないか。僕はどれだけ待たせた?

もう考えて居られなかった。

皆を取り返す、どうやってなんて考えない。

皆が居なくなったら僕はもうどうしようもない。もう生きたいとも思えない。

(ねえ、あなたは皆を助けたいんでしょう。そのためなら何でも出来る?)

出来る???

皆を助けられるなら何だって出来る??

(そう、じゃあ強く思いなさい、今のあなたの気持ちを)

今の僕の気持ち? そんな物ただ一つだ。憎きあいつらから皆を取り戻す。もう絶対に大切な人達を奪わせない。

僕の体が光始めた。昔の光景が思い出される。今までの連れ去られたときの光景だ。そうだ、泣いていたのは僕だけじゃなかった。

この気持ちが強くなる。あいつらから皆を取り返す、もう誰も悲しませない。

僕の体を黒くて赤い炎が包み込む。僕の体は小さく細くなっていく。髪が紅くなり

腰まで伸びる。服は赤と黒で彩られてズボンはスカートになっていく。

「沸き上がる怒り??キュアファシエ??」

力がわき出る、足も早くなる。もうあいつらが見えてきた。

「まてえええええ??」

こちらを向く前に殴りかかる。吹っ飛んでいく。

数は20体くらい。今まで見てきた中でも一番多い。

でも関係ない。今までの僕じゃない、全員倒すその力が今の僕にはある。

(あなたは炎を使えるわ。一網打尽にしてやりなさい。)

不思議と力の使い方は分かる。こう言えばいいんだね。

「燃え盛れ??プリキュアファイヤーサークル??」

周りに炎の円が出来る。そして炎が吹き上がる。

あいつらは燃えるのではなく光に包まれて消えていく。

そして炎が消える。でも皆はいなかった。あの炎で燃えたわけでもない。

なのに居ない。全身の力が抜ける。いつの間にか体も戻っていたがどうでもいい。

僕は、どうすればいいんだ。